

『日本アジア研究』第16号(2019年3月)

ハンセン病療養所の医療過誤 ——医療過誤訴訟原告からの聞き取り——

福岡安則*・黒坂愛衣**

山下ミサ子(医療過誤訴訟上の仮名)の語るライフストーリーは、文字どおり波瀾万丈の物語だ。彼女は1938(昭和13)年、鹿児島県の生まれだが、5歳のときに父親が出征。そして、戦死。中学校3年のときには、母親が3人の子どもの育児をネグレクトして、姿を消す。ハンセン病を発症し、中学を卒業した年の夏に、鹿児島県鹿屋市の星塚敬愛園に入所。ここで10年間の療養生活をおくるが、あるとき、藤楓協会の濱野規矩雄理事長の随行で高松宮夫妻が来園。彼女は高松宮妃の気に留められるようになり、濱野理事長の世話で静岡県御殿場市にあるカトリック系の神山復生病院に転園。そこで、上智大学のガラルダ神父や何人かの著名人の知遇を得る。

1970年に復生病院を退院した後、復生病院に慰問に来ていたアメリカ人夫妻の招きで、1年弱のアメリカ滞在経験をするなど、社会のなかで、長年にならないうち、やさしい心根の人たちとの交流を深めていたし、ハンセン病に理解ある夫との結婚生活をおくっていたが、病気が再発し、多磨全生園に再入院。そこで医療過誤に会い、並里まさ子医師に命を救われるとともに、国を相手取って医療過誤訴訟を提起。この聞き取りで語られた多磨全生園での医療過誤の実態は、すさまじい。東京地裁での一審判決は、全面勝訴。国の控訴を受けて、のち和解に至る。——ハンセン病に対する「強制隔離政策」は“ハンセン病医療をもハンセン病療養所に隔離してしまった”と言われる。そのなかで、医療の貧困がいかにかたち作られたのか、記録に留めておきたいと考える。

聞き取りは、元・栗生楽泉園副園長の並里医師が所沢市に開院した「おうえんポリクリニック」にて、2011年2月6日、おこなった。聞き手は、福岡安則、黒坂愛衣、足立香織(当時、埼玉大学の福岡ゼミの学生)。退所者で、山下ミサ子の裁判を全面的に支援した川島光夫(かつての園名)が同席。山下ミサ子の語りは、「話をするとき、その出来事と、そのときの風景と、そのときの話、ぜんぶ浮かんでくるもんだから、ついつい、ベラベラしゃべっちゃうのね」とおっしゃるとおり、雄弁で、しばしば笑いを誘う語りは、5時間におよんだ。

なお、彼女には前半生を綴った著作『ほほえみて』(1989年)がある。

キーワード: ハンセン病問題, 医療過誤, ライフストーリー

* ふくおか・やすのり, 埼玉大学名誉教授, 社会学

** くろさか・あい, 東北学院大学准教授, 社会学

本稿はJSPS科研費22330144の助成を受けた研究成果の一部である。なお、本研究の成果は著者自らの見解等に基づくものであり、所属研究機関、資金配分機関及び国の見解等を反映するものではない。

父親は戦死

昭和13年2月4日〔生まれ〕。73〔歳〕になりました。鹿児島市の川内（せんだい）市の生まれ。父の姉がお嫁に行った先の旦那さんがやってるガラス工場（こうば）があって、父親はそこで働いてたんです。〔きょうだい〕は妹と弟。

私が5歳のころに父親が戦争でフィリピンに行った。明日行くっていう日に、兵隊服着て、みんなとお酒飲んだりして。みんながお父さんを持ちあげて、ワッショイワッショイ。そしたら、兵隊服のボタンがポトンと切れて。お父さんの姉さんが「縁起が悪い」って言って。母親が泣きながら一生懸命ボタンをつけてた。そのときに、私は酔っぱらっちゃって。甘いお酒だったの。残ったの、ゼーンぶ飲んじゃって。お尻叩かれた、父親に。

〔父は〕戦死しました。〔昭和〕18年生まれの子が生まれてすぐ征（い）って、帰ってこなかった。私がたぶん7つのころです、亡くなったのは。そのときは疎開してたんですよ、母親の実家の、川上って田舎へ。おばあちゃんがいたから、そこへ引き揚げて。鹿児島が空襲でやられたときも、田舎の山から、空が燃えてるのが見えるんですよ。そんなとき、父親の実家のおじいちゃんが、流れ弾で馬と一緒に死んじゃったの。焼酎の工場も全部燃えちゃって。

そして今度、キラキラ、なにか落ちてきて、拾いに行こうと思ったら、みんなが「触るな！ 触るな！」——終戦のビラが落ちてきたんです。

小2のとき大火傷

〔川上では〕お風呂は、隣のうちに、いつも入れてもらって。水道なんかないから、棒で〔担いだ〕樽と樽に水を汲みに行って。この前も妹が言ってたけど、私はほんとバカだったみたいで、樽を棒に担ぐとき、その先に縄を二重にしてすれば大丈夫なのに、私いつも一重（いちじゅう）にして。坂道があるの。そこに行くと、樽がトントントントン、バシャーンってこぼして。いつも泣いてたって。近所の山に行って薪（たきぎ）を拾ってくるのにも、私の場合、折れた木を拾ってきれいに揃えるのはいいけど、おんぶして、下に下（くだ）っていくまでに、ゼーンぶ薪が一本一本落ちて。妹がその後を拾って。そんなんで、泣いてばかりしてたみたいなんです。それで、母親が「ミサ子は連れて行かんでいい」って。『少女クラブ』とかいろんな本を買ってきて〔くれて〕。私、家の中の柱に寄りかかって、本ばかり見てたんです。吉屋信子の『あの道この道』って本を母親が買ってきてくれて、それ読んで私泣いてばかりいたの。悲しい小説。

小学校2年生のとき。正月が来るので、庭で焚き火で糯米（もちごめ）を蒸して。そして、その灰をとって炭にするんですよ。友達と鬼ごっこしてたの。「危ないから、あっち行け」って言われても、ぐるぐるぐるぐる回って。その炭のところにボンと落っこっちゃって。

近くに病院がなくて、近所のおじさんが抱えて犬猫病院に連れてってってくれて。〔翌〕朝、お母さんが「学校行く〔時間だ〕よ」って〔私を〕起こしたけど、「手、どうかしたのかあ」ってお母さんが泣いてるわけ。左手が肘も指も曲がって、伸びないの。こんどは、山の中にあった病院を探して、学校へ行く前に毎朝、そこへ行って治療してもらったけど、よくなるし。いつもコートを肩にひっかけて、ランドセルはこっちだけ掛けて、学校に行ってたの。

〔その後〕鹿児島市立病院に、バスに乗って、母親が連れて行ってってくれて。

「どっちから〔手術〕したほうがいいか」って言われて、「洋服着れないから、肘からお願いします」って母親が言って。何日か通ってたら、肘は伸びたの。それで今度は手の手術をする〔予定〕にしてたら、父親が戦死したっていう通知が入って。それで母親がガクンときちゃって、もう私の病院どころじゃなかったの。そのまんま、指（こっち）は。

〔運動は苦手だったか、ですって？〕思い出話で、妹がこの前もゲラゲラ笑って。私は、運動会でも泣いて走ってたんだって。親子リレーがあるでしょ。私はスタート遅かったから、こっちの人、もうバトンを渡すのに、私はまだ真ん中あたりを泣いて走ってるんだって。それでこんど、お父さんが出るのがある。妹が、校長先生のところに走って行って、「校長先生、今日一日私のお父さんになりなさい」って言って、校長先生が妹のお父さん役で走った。それのお礼でね、〔妹は〕毎朝早あく学校に行って、校長室を掃除して。それで、校長先生は、自分の子どもみたいに〔妹を〕かわいがってくれて。妹は頭がよかったし、級長ばっかりしてた。

〔父親がいなかった私たちを〕学校の先生たちがすごくよくしてくださってね。給食費は払わないで済む。〔級長の〕妹は給食の袋をみんなに渡すでしょ。それを一人の男の子が見てて、「おまえは給食費持ってこんのか？」って言ったんですって。〔妹は〕校長先生のところへ行って、「クラスの子に、私、給食費払わなくて言われた。なんでですか？」って言ったら、「教科書（ほん）も、学年が上がるたんびに、あんたたちは新品で、本の匂いがするだろ。あんたのお父さんは日本のために死んだから、国の決まりで、本と給食はタダになってるんだから、気兼ねせんでよかよ」って言われたって。

中3のとき母親がいなくなる

母親は、私が中学校3年のときにいなくなった。おばあさんも亡くなったから、私と妹と弟だけになった。私が泣けば妹も弟も泣くから、絶対泣かなかったの。弟と妹は小学校で給食あるけど、〔私は〕中学校だから弁当を持っていく。いちおう、ご飯を炊いて、梅干しをはじっこに入れて。昼食の時間は「お腹が痛いから」と嘘言って食べなかったの。帰りに山の中で弁当を食べた。帰ってきて晩ご飯を作ろうと思っても、なんもない。そうだ、団子の汁を作ろうかなって思ったけど、団子のダシもわからない。どんなもんで食べたか覚えてないの。でも、〔小学校の〕給食のおばさんが妹に「持って帰んなさい。3人で食べるんだよ」って、給食の残りを包んで持たしてくれた。弟は弟で、近所のおばさんに「じゃがいも掘りするから手伝わないかあ」って言われて。手伝ったら、バケツ一杯、じゃがいもをくれて。

学校のPTA会費も持っていかなきゃならないから、「お母さん、帰ったらお金をください」って〔紙に〕書いて、家に置いて、行くの、学校に。それでいつも、むこうの下からね、「おかあさん！」って帰ってきよったの、私ら。最終バスが通るのが見えるんですよ、むこうの遠いところ。で、提灯を持って、綿入れを着て。ちょこちょこ下ったところに、お店屋さんがあるの。そこを通れば、「あ、3人、いつも通る」って言われる、〔そうなると〕お母さんの悪口言われるからって、山道を〔通って〕バス停まで行ったら、バスの運転手さんに「今日もお母さん、乗ってなかったよお」って言われて。で、また、3人で山の中を帰って。〔そういうとき〕茶碗も4人分揃えて行くんですよ。お母さん

がなにか買ってくると思って。そしたら、弟なんか〔空の〕茶碗と箸だけ持って、こっくりこっくりして。つつい食べないで寝るの、3人とも。で、朝起きてみたら、お母さん、布団の中いないし。“ああ、帰ってこなかったなあ”って思いながら、じゃがいも、もらってきたの茹でたりして。私、そういうとき泣いてた、ひとりで。

私は、修学旅行に行っても、顔がむくんじやってね。縞みたいになるの、真っ赤に。斑紋だったのね。〔知覚麻痺も始まって〕足のところがいつの間にか火傷して、水ぶくれがあった。そういう状態で〔中学を〕卒業して。卒業したら、イトコの姉さんが先生をしてる洋裁学校に行く予定でいたんだけど、体がだるーい。それがずうっと続いて、大風でドンドン音がして、私がわあわあ泣いたら、隣に聞こえたらしくて、うちと同じ年の息子さんが来て、「お母さんは？」って言うから、「お母さん、帰って来ん」「いつから？」「ずっと帰って来ん」。おばさんが父親の実家に連絡をとってくれて。鹿児島島の叔父さんが、私らの母親がもう1ヵ月ちかく帰ってこないことを知って。〔外から〕帰ってきたら、家〔の戸〕が開いてるから、「あ、お母さん、帰って来た！」って走ってきたら、叔父さんが馬車に私らの荷物を乗してるわけ。「今日から、脇田（わきだ）に行くんだから、早く乗れ」って。〔脇田って〕お父さんの実家。〔死んだ〕父親の物も全部入れて。母親の物だけ置いて。〔出発しようとして〕したら、〔学校の〕先生たちが来てくれて。「お母さんね、なんか悪い夢みてるんだから、必ず帰ってくるから。お母さんを恨むんじゃないよお」って言われたこと覚えてる。

母親がうちへ帰ったら、釘づけにされてて、びっくりして。隣近所に〔聞いて〕脇田に来たの。夏の祭りのときだった。お母さんとお父さんの仲人をしたおばさんが〔母を〕連れて来たの。〔私がお祭りから帰ると〕みんなが「いま〔家に〕帰ってくるな。お母さんが連れに来てるから」って。そおっと裏のほうから見てたら、母親が泣きながら帰って行ったわけ。それが最後、姿見たのは。そのときに、親戚のおばさんなんか「みんな、ここに座れ」って〔言われて〕。「母親があんたたちを連れに来たけど、付いて行きたかったら、手をあげろ。その代わりに、サーカスに売られるぞ」って。昔、サーカスに売られる〔って言われたら〕怖いイメージがあったよ。妹も弟も私を見て、私が〔手を〕あげなかったから、あげなかった。で、おばあさんが言ったの、「ミサ子は、鹿屋の療養所（びょういん）に行かんとならん」。弟は、脇田の叔父さん夫婦が引き取ってくれて。妹は妹で、指宿のイトコのお姉さん夫婦が面倒みるからっていうことで、〔きょうだい〕3人バラバラになったんですよ。

中学を卒業した年に敬愛園入所

〔脇田の〕家にいるようになってから、「ミサ子は、いっつも、だらんだらん、寝てばかり」って、おばあさんに怒られてたの。だんだん顔が腫れて、顔がむくんで。いろんな病院に通ったけど、原因がわからない。親戚のお姉さんが看護婦さんしてて、昔働いていた鹿児島市内の病院に連れて行ってもらったら、私だけ廊下で待ってて、お姉さんが泣きながら出てきて。お医者さんに「あんたはらいになった。3ヵ月すれば治って帰って来れるから」って言われた。それから、あっちこっちから親戚の人らが来てくれて。みんな、泣くのね。みんな、なんで泣くんかなと思ってね。洋裁学校の先生してたイトコのお姉さんは、

ワンピースを作ってくれて。

〔鹿屋へ行く日は〕隣近所にはわかるといかんからと、朝3時に起こされて。叔父さんと洋服を作ってくれたお姉さんが、付いて行ってくれたの。鹿児島県のボサド棧橋だったかな、そこから〔船に〕乗って、垂水まで行ったら、今度はジープみたいのが待っていて。で、〔ジープから〕降りてきた人、みんな白衣（びゃくい）着てるのね。そして、私は、DDT、車の空気入れのようなので、頭から真っ白に〔されて〕。お姉さんが作ってくれたピンクの服も、真っ白になって。わあわあ、私泣いた。姉さんも泣く泣くね、「なんでここまでせんとならんのですか！」って怒ってね。〔そのお姉さん、川内の〕ガラス工場のおじさんの娘。

敬愛園に着いて、病棟に連れていかれたら、男も女も一緒〔の病室〕だった。みんな、義足の人とか〔体の〕不自由な人。それ見たら、私も手が悪くて片輪だから、ここに捨てられたんだと思ったの。昭和28年の8月だった。タクシーが〔来たから〕って〔叔父さんと〕姉さんが帰るときになってね。私、裸足でベッドから下りて追っかけたけど、看護婦さんに引き止められて。姉さん、車の中で泣いてた。それからもう、私、ベッドの上はずっと正座して、ご飯も食べなかった。水だけちょこっと飲んで。看護婦さんに「ご飯食べなきゃだめだよ」って言われて、3日ぐらいてしてから食べるようになったけど、1年、人と口きかなかったの。

私が中学校出てきてるから、少女舎〔じゃなくて〕、どこの部屋に入れようかって。それで時間かかって、何ヵ月か病棟生活したの。そして、部屋がみつかって。乙女寮。12畳に4人ずつ。そこに行ったら、みんな初めての人ばかりだし、その姉さんたちとも口もきかないで、隅っこに一人で座ったきりで。それで、仕事と一緒にいったほうがいいってということで、連れていかれて。不自由なおじさんたちの足の傷を看護婦さんが〔手当て〕する〔手伝い〕。包帯巻く仕事だった。それやってるあいだに、徐々に徐々に慣れてきて。そして、こんどは、姉さんたちが〔寮の〕裏で、着物の洗い張りしてたの。結んだ紐が切れて、「あれれ」って。〔そしたら〕私が笑ったの。「ああ、ミサちゃんが、初めて笑った！」それがきっかけ。1年は人と〔口をきかなかった〕。

10年間の星塚敬愛園での療養生活

敬愛園には、〔昭和〕28年から10年いました。

〔敬愛園に入ったとき、職員の人から名前を〕変えるように言われたの。なんで名前を変えなきゃならないんだろうって、怖くなって、「嫌だ、嫌だ」って言ったの。そしたら、「本人が嫌だ言うんだったら、仕方ないなあ」って。で、〔本名の〇〇の〕まんまで〔過ごした〕。一回、「〇〇さん、荷物がきましたので、〔事務〕別館まで取りにきてください」って〔園内放送があった〕。その夕方、〔園内放送で私の名前を聞いたって〕Hさんが旦那さんとふたりで来て、「あんたは、新左衛門さんの孫ね」って言われたの。「はい」って言ったら、「私は、あんたのうちの焼酎工場で働かしてもらってたんだよ」って。旦那さんはなんともなかったんだけど、その人は鼻が全然なかったの。その人を見て、ものすごい泣いちゃった。いま考えれば、悪いことした思っ。

もうひとり、Mさんって人が、「〇〇っていえば、私が子守りした子だ」って、近くの人に言ったらしいの。それを聞いた人が来て、「あんたを子守りした人があるよ」って。Mさんは〔直接には〕一切私には言わなかったけど、息

子が面会に来てたのね。その子が来るたんびに、私の部屋に遊びに来るんですよ。だから、私は、一回、川内の伯母さんここに帰省したときに、「おばさん、ガラス工場にこういう人がいたあ？」って言ったら、「弟さんもいたよ。姉弟（きょうだい）ふたりで働いてた。女の方は手に包帯巻いて働いとった。あんたのお父さんが、ほら、あんたをしょっちゅう工場に連れてきちゃあ、工員さんがみんな、おんぶしたり抱っこしたりしてくれたんだよ。あの人だよお」って。その姉弟（きょうだい）、突然、なんにも言わずに辞めたんだって。で、[私が]「弟さんも[敬愛園に]入ってるよお」って言ったの。そしたら、[イトコの]姉さんがね、「ミサちゃん、その人にね、嫌な思いさせないように、知らん顔しときなさいよ」って。「その人があんたを抱っこしたから[病気が]うつただのなんなのって、絶対思わないでよ。これはもう、あんたの持って生まれた運命（あれ）だから。そのおばさんたちを恨んじゃだめだよ」って、念を押された。それで、私も[Mさんには]最後まで言わなかった。——[敬愛園で]本名使ったので、2件、そういうことがわかったの。

入院してから[最初の]2年は帰らなかつたけど、3年目ぐらいから、年に1回、かならず正月は、1週間[の帰省許可をもらって]帰った。[私が脇田の]うちへ帰るようになったら、隣近所の人も“あ、帰って来れるもんだ”と思ったらしくて。妹なんかが言ったのは、「姉ちゃんが療養所（びょういん）に行ったのがみんなにばれて、突然、明日から遊んでくれなくなった」って。私が、ちょいちょい帰れるようになってから、[また]みんなが遊んでくれるようになったって。

ほれで、[私らきょうだいを]育ててくれた[脇田の]おばさんがもう84歳で、この前、誕生日でね。お土産、いつも送るんだけど。叔父さんが遅く兵隊から帰ってきて、お嫁さん探してて、そのおばさんとどうかって話が出て。そのとき、私らが父の実家に行ったでしょ。叔父さんがおばさんに、「おれは、兄貴の子ども3人、育てる責任がある。3人がぐれないように育てたいから、自分たちの子どもはいらん。[それが嫌なら]別れて帰ってくれてもいい」って言ったんだって。[そういう覚悟で、私たちを]育ててくれたの。

[星塚敬愛園での]治療は、プロミン注射。[でも]神経痛がきた。それで、プロミンをやめて、プロトゾールっていうでっかい玉、あれを何年も飲んでました。[それと]大風子油[の注射]をしたの。「退院したかったら、大風子を打ったほうがいい。社会復帰する人は、それをする人が多い」って聞いたもんだから、私もしてもらったの。大風子は週に3回。お風呂に行ってから、すぐしてもらいに行ってた。畳針くらいのでっかい針[の注射器]で、それに熱い油が入ってるのね。大風子油は、太股とかお尻に打ってもらった。

[私が敬愛園に入所した2年後には、長島愛生園に新良田教室ができたけど、行きたいとは]全然思わなかった。そんな島に行くよりも、早くうちに帰りたいっていう頭しかなかった。

藤楓協会の濱野理事長の世話で神山復生病院へ

敬愛園にいたときに、ちょうど高松宮殿下〔御夫妻〕がみえて。濱野理事長が連れてきて。それで私らが並んでたら、婦長さんが洗面器に消毒液を持って、妃殿下の後ろを歩いてるのね。そしたら、高松宮様が「患者さんの前で、こういうことしないでほしい。捨ててください」って捨てさせたの。それで、私ら

のどこ回ってこられて。私が、こうして下うつむいてたら、「いま何歳なの？」って。「19歳です。うちへ帰りたい」って泣いちゃったの。そしたら、妃殿下が「帰れるよ、帰れるよ」って、一生懸命なでてくれて。

しばらく経ってから、別館に呼び出しがあって。「あんた、濱野先生から手紙がきたけど。退院したい、帰りたいって言ってたっていうけど、本当に帰りたいの？」って。「はい」って言ったの。そしたら、高松宮妃殿下が、私のことをちょっと調べてほしいって[頼んでくれた]らしいの、藤楓協会に。それでまた連絡があって。「御殿場にある私立病院に転院しないか」って。どんな病院かいうたら、カトリックの。私は、「アーメン？ そんなの嫌だ。外国の宗教は嫌だ」言ったけど、濱野先生からまた手紙がきて。「こっちへ出てきたら、慶応病院の先生にも[診てもらって、左手の火傷の痕も]ちゃんとしてもらえるよ。退院するまで私が面倒みるから、上京しなさい」って。それで、行く決心ついたんですよ。うちの叔父さんなんか、みんな反対だったの。「なんで、わざわざ、そんなところへ行かなきゃならんかあ」って。でも、私は手[の火傷の痕]をよくしてもらいたい、って頭だったから。それで[約束どおり]慶応病院に連れていってもらって、診察してもらった。手術は復生病院でしてくださることになって。医者(せんせい)が手術[しながら]、「ああ、これは厄介だあ」って言われて。ここに筋を入れてもらったけど、結局、[ハンセン病が]再発したときに、一晩でポトーンと、利かなくなったの。いまもう、全然ない、感覚(かんじ)が。

[話を戻すと]私一人で、初めて鹿児島を出て。[むこうに着いたら]シスターたちが迎えに出てくれて。「これは変なところへ来たなあ」と思って。鐘が鳴ると教会へ行かなきゃならない。何時に起きなきゃ、ご飯食べちゃいかん。「なんちゅうとこにきた！」と思ってね。瞑想[の時間]もあったの。知らないから、私、ラジオかけてたの。そしたら、シスターが「ミサちゃん、ラジオかけても、テレビみても、ダメなの。教会に来なさい」。「私、そんなところ行くの、嫌だ」。そしたら、ミサに行くとき、おばあさんがわざとバタンバタンするのよ。しまいには、東京の神学生がいっぱい来ると、必ず私のところへ連れてくるわけよ。[さらに]麻生太郎さんのお母さん、麻生和子さんがね、国際婦人のなんか会長やって、外国の奥さんたちをぞろぞろ連れてくるんですね。そのたびに、私の部屋に連れてくるの。それで、麻生[和子]さんが「なんか欲しいのい？ 今度来るとき持ってくるから」って言われて、本を買ってきてくれたり。それから、横須賀の基地の外国の奥さんたちが[いろいろ]持って来てくれて。洋服も靴も、私、全部サイズが合ったの。だから、外人のおさがりばかり、真っ赤なのを着たり、高い[ヒールの]靴はいたり。それでね、弟が面会にきて、「ちんどん屋みたいだ」って。

弟は就職が決まって、東京に来てたんですよ。面会に来てくれても、私がこの病気っていうの、知らないの。鹿児島にいたときも、中学校のころ、夏休みには、私のところ泊まったり、『ベン・ハー』っていう本を送ってきてくれた[こともあった]。[私の]ハンセン病のこと知ってて[その本を]送ってきたと思ったの。そしたら、知らなくて。[御殿場に移ってから]何回も面会にも来てるのに、「姉さんの病気は何の病気ですか？」って聞くの。「なんでこんなこと聞くかは、鹿児島に帰るたんび見合いを、もう10回ぐらいさせられてるんだけど、そのたびに叔父さんが『おまえは、ミサ子のことをわかってくれる人

でない、あれだから』って言う。それで、何の病気が教えてください。「いやあ、困ったな、これは」と思って。思い切って〔ほんとうのことを〕書いたの。2ヵ月くらい、ウンでもないスンでもない、〔手紙も〕来なくなって。で、イトコの姉さんに手紙書いて、「弟に〔私の〕病気を教えたら、手紙が来なくなった」って。そしたら、姉さんが「そういえば、あんたの病気の話を、家族でしたことなかったなあ」って。わざとしない、っていうんじゃないかね。「私たちが悪かったね」って。「でも、彼のことだから、悪いほうには考えないと思うから、一時（いっとき）様子を見たほうがいい」って。しばらく経ってから〔弟から〕手紙がきて、「今度、何月何日に行きます」って。そこで、上智大学にいるガラルダっていう神父さんに、「弟が来るから、いろんな話をしてもらいたい。復生病院に来てくれんか」って、手紙出したの。そしたら、大学（がっこう）休んで来てくれて。私の部屋で、神父さんがいろんな話、してくれて。弟も気が楽になったらしくて、「姉のことをお願いします」って言って。――ガラルダ神父様は復生病院によく、ギターを持って遊びに来てたの。

その神父さんには、私はすっごく〔お世話になった〕。箱根の山に歩いて行けるから、ゼンマイ採りに行って帰ってきたら、夜ね、梅干しぐらいの、すごいおっきいのがいっぱい出たの、体に。怖くなって、すぐ医者（せんせい）に診てもらったんですよ。「原因がわからん。ハンセン病のあれじゃないような気がする」って。静岡の病院で〔調べて〕もらったら、急性関節リュウマチ炎。ベッド生活が1年続いた。そのときに、リュウマチの薬、オレンジ色のちっこおい菓でしたね。「これ、飲みなさい」って言われて、飲んで、3分もしないうちに私、意識不明になっちゃった。夢を見て、うなされて。目が覚めたら、明くる日の11時だったの。ガラルダ神父様が、ベッドのところで団扇をこうしてるの。「ミサ子、大丈夫だよ。お祈りしたよ」って。「神父さん、なんでここにいるの？」って言ったら、「弟さんの電話番号がわからないからと、〔私のところに〕タベ、シスターから電話があったんだよ。危篤状態だから来てほしいって」。神父様は一晚寝ないで付いてくれてたんですって。

そのころ、神学生や神父さん、私の部屋に来ちゃあ、みんなでビール飲んだりして。しょっちゅう〔規則〕違反。それで、隣の部屋にはカナダ人のシスターがいてね。夜9時ごろ、トントンと叩かれて。そのシスターが「私も仲間に入れて」って。「あんた、修道女で〔お酒を飲んだって〕わかったら、院長さんに怒られるよ」。「いいから。来たんだから！」裏からこっそり、スリッパで来て。修道女のベールも脱いじゃって。〔みんなに〕「飲め飲め」って言われて、真っ赤っかになって。私の部屋に来てお酒飲むの、みんなそれが楽しみだったのよ。ほんと、いつも院長さんに怒られてた、私。

交替制で神父さんが、修練で来てたのね。〔患者さんに〕お食事を配ったり、散歩に連れていったり、足をマッサージしてあげたりしてくれるの。ガラルダ神父さんが、1ヵ月、患者さんの面倒をみにきてたときに、「昨日、いままで見たこともない患者さんが入って来た」って。静岡の大井川の橋の下に小屋をつくって〔住んでる〕変な人がいるということで、保健所が行ったら、鼻もない、まぶたもない、唇も溶けて、歯が、こう出てるの。看護婦さんに「見ちゃダメよ」って言われたんですよ。「見ちゃダメよ」って言われたら、見たくなるよね。それで、ガラルダ神父さんに「私にも会わせてほしい」って言ったんですよ。神父様が院長の許可をもらってくれて、会いにいった。ほんとにびっく

りました。そしたら〔じつは〕ハンセン病じゃなかったの。梅毒。お母さんからもらったんですって。それで、若いときの、きれいな写真を持ってらして。ガラルダ神父様と何回も面会に行ってる。その人、梅毒ってわかったから、静岡の病院に引っ越しされて。——ああいう人と巡り合って、ああ、「らい病」ってたいしたことないな、っていう感じになったの、私。すごくいじめられて、石投げられたりしてたらしいの。“自分は、まだありがたいなあ”と思って。それから、だんだんだんだん、みんなが来てくれたりしてるあいだに、私もね、「もう退院したいなあ」っていう気持ちになって。

〔洗礼は〕退院の目処（めど）がつきそうになったころ、3人一緒に受けました。クリスマスの日。〔でも〕真面目な信者（ひと）じゃなかった、私。面倒臭くてね。おんなし時間に行ってさ、おんなしお祈りしてさ。そして今度は、告白する。なんで告白するの？自分がした悪いことって、告白せんでも、見た人がわかるじゃない。私、そういうのがね、とてもじゃないけど〔性に合わない〕。縛られるのが嫌。よくみんな、ここに何十年もおれると感心したの。

〔私がいたときは、神山復生病院にはハンセン病患者は全部で〕80人かそこらいたんじゃないですか。女のほうも2棟あって、〔一部屋に〕2人ずつ入ってて、30何人ちかくいたから。それで、男の人を部屋に入れちゃいけません、とかね。なあに言ってんの！後ろのほうからトントンで。「ラーメンある？」って言うから、「あるよ」って。お腹空いたら〔食べにくるのね〕。

「東梅寮」に住んで仕事に出掛けた

〔私は〕復生病院に〔昭和〕38年の10月に行ったの。7年いて、退院しました。〔そして〕藤楓協会が渋谷の笹塚に作ってる東梅寮（とうばいりょう）〔に行きました〕。木造二階建ての一軒家。トイレは1つ。台所も洗面所も共同（いっしょ）。お風呂は銭湯〔に行く〕。そこに3年ぐらいいたかなあ。〔みんな〕次々〔顔ぶれが〕替わるのね。ちょっとで出て行くもんですからね。

神山復生病院を退院したときは、仕事は〔決まっていなかった〕。そしたら、〔復生病院の退所者の〕石山〔春平〕さんたちが働いてたところが、時計のバリ〔取り〕をするところで、調布のほうまで電車に乗って通って、そこで〔しばらく〕働かせてもらった。

そして今度、「アビリティーズ」っていうところがあるっていうことで、〔訪ねて行って〕社長と会って。社長も身障者の人だった。足が悪くて。そこで働かしてもらった。

〔そこでは〕早稲田〔大学〕とか慶応義塾〔大学〕の教科書（ほん）の版下を作るのをやってたの。カメラの仕事。あっちに版下置いて、こっちから写して。

〔そして〕焼いて。そういう仕事をやってたから、フジフィルムに勉強に行かされた。それで、勉強が終わったら、その足で〔会社に〕帰って、また仕事して。だから、毎日、残業残業。〔夜の〕11時〔まで〕。つらかったあ。社長が厳しいものね。それで、復生病院（ごてんば）の職員だったSさんて女の人と一緒に働いてて。Sさんは健康者だから、もう、どこまでも使われるの。あの人、それこそ、会社の酷使（あれ）で死んだようなもんで。寝不足が続いて、ストーブに転んで火傷したり。私、朝は人より先に行って、掃除をしてたんですよ。そしたら、「Sさん、なんでいるの？」夕べからぶっ通しで仕事してた。それで、納品に行くときに、高速道路で居眠り運転で即死だったの。雨の降る日に。

即死って聞いた途端に、社長が、残業でいたみんなに「タイムカードを全部焼け」って。だから、Kさんが怒って、そのことを警察に言ったの。

私も、カメラ室で倒れたんですよ。夜遅くまで〔残業して〕、もうフラフラして帰りました。もう1人、倒れたから、“なんか変だなあ”と思って、全生園に行ったら、眼科のA先生が、「なんの仕事してる?」「カメラ」「目がよくなってきてるから、もうやめなさい」って。社長に〔診断書を〕書いてくれて。そしたら、「ミサ子さん、全国のカトリックの大学、高校を回れ」って言われて。おっきい外国の聖書(バイブル)持って。それと、教科書とかいろいろの持って。カトリックは「あんたが一人で行け」。そして、男の人がプロテスタントに一人で。つらかったあ。それを回るときが、一番。もう、泣きたくなくなるくらいだった。青森に行ったときの修道院の院長先生の待遇に、ものすごく悲しくてね。私は、ほら、ハンセン病の話、全部ちゃんとするから。〔そしたら〕「帰ってください」って、入れてくれなかったの。今度、仙台の教会に行って、30代の先生に言ったの、「こうこうだったあ。嫌な思いしたあ」って。そしたら、ちゃあんと一晩、寮に泊まらしてもらって。〔カトリックの〕学校もまた、その神父さんが紹介してくれて。〔でも〕1万いくらなんですよ、そのバイブルが。「こんな1万もするような本はない!」って、みんなに言われたの。社長には「売り上げがない」って怒られるし。で、台風が来て大雨になって、ちょうど新潟に着いたとき、もう最終だったの。〔駅から〕歩いて行けるホテルへ泊まるしかないと思って。そしたら、1泊5千円だったの。食事なしで。帰って、領収書だしたら、「なんで、こんな高いホテルに泊まった!」と怒られたの。S君て男の子は、しょっちゅう怒られてた。「いいとこへ泊まってる」って。その人も身障者なんですよ。ほんとにね、つらかった。

〔そのころ〕「全国の身体障害者の人を呼んで、アビリティーズの集いをやりたいけど、なんの催ししていいかわからない」って、社長が話してるの聞いたから、〔私が〕坂本スミ子さんと宮城まり子さんをお願いしたら、別〔々〕の日に来て、何曲か歌ってくれて。1円も会社は払ってくれなかったの。お礼しなかったの。だから、私、「ごめんなさいねえ」って。「いい、いい」って言われて。

〔ほかのときにも、社長が〕「ミサ子さん、お金がないんだけど、なんか方法ないかね」って、私に言ってくるのね。〔それで〕私が高松宮様のところに電話して、「社長がこう言ってるんだけど、貧乏だから……」って私が言ったら、ご夫婦で来てくださった。「アビリティーズ」の社長の嫌なところ、〔私はいっぱい〕見てる。〔麻生和子さんにお世話になったときも〕社長が「ミサ子さん、これ、あんたから〔麻生さんに〕送ってやって」って。温泉饅頭みたいなのが入った〕菓子箱。ええー、と思って。ああ、私〔自分で〕買ってきてよかったなと思って。

夫との出会い

〔あるとき、私が訪問販売先の〕青森から帰ってきたら、社長が「ミサ子さん、麻生さんていう人があんたに電話をくれって」。電話したら、麻生〔和子〕さんが、私の退院に何もお祝いしてあげられなかったから、会社のみんなで3泊4日で長野の蓼科に旅行するようになって。「大型バスを提供しますから。そのバスが私のプレゼントだ。運転手も私が信頼をおいてるドライバーだから、

安心して行ってらっしゃい」って。運転手の人が「はじめまして。WKと申します。3日間よろしくお願ひします。ミサ子さんって、どなたですか？」「私ですけど」って。それで初めて旦那を知ったの。そのあと、「私、じつは、らい病で、こうこうだ。復生病院を出て、いま、ここで働かしてもらってる」っていう話をして。そしたら、「一度、ぜひ、復生病院に連れて行ってくれ」だったの。で、復生病院に何回か連れてってやって。

〔うちの旦那は〕そのあと、フランス大使館〔の運転手として〕10年以上、働いた。大使が4代、替わった。大使が替わるたんび、嫌いな大使の奥さんのときは、〔旦那は〕わざと英語でしゃべるんだって。フランス人はプライドがあって、フランス語でないと返事しないんだって。〔日光東照宮に〕眠り猫〔を見に行ったときも〕英語でしゃべったら、大使の奥さんに「フランス語にしないさい」言われて。黙あってたんだって。そしたら、「あー！」って声が聞こえたから、見たら、ほら、水が流れるところがあるでしょ、道路に。そこにハイヒールがストーンと〔挟まってたんだって〕。うちへ帰ってきて、「あのばああ、ざまあみろ」って。「おれは知らん顔してた」って。やさしい奥さんだと、一生懸命になってね、してあげるの。でも、あんまり意地悪な奥さんだったから。そういうこと、いつも、帰ってきちゃあ、話しするの。面白かった。

1年弱、アメリカへ

〔「アビリティーズ」で働いたのは〕3年ぐらい。「〔社長は〕身障者を利用して」ってみんな言ってる。ちょうど〔「アビリティーズ」に嫌気が募ったときに、映画〕「あつい壁」を作った〔監督の〕中山〔節夫〕さんと会ったの。で、中山さんに「いま、どんな仕事してるの？」って。「いま、こうこうだ」って。「ミサちゃん、うちで働かないか？」って言われて。高円寺のプロダクション「MIRAI」ってとこに変わったの。中山監督のところには、1年もいたかしら。ちっこい部屋だったの。ちょうどクーラーがある下が〔私の事務〕机だったのね。来る人がみんなカメラマンで、男ばかりでしょう。地方から帰ってきたら、みんな「暑い、暑い」で〔クーラーを〕つけて。だから、こっちが痛くなりだして。いやあ、神経痛、始まったあとと思ってね。これはダメだと思ったから、「中山さん、私、辞めさせてもらおう」って。

そして、バーバラさんという人のところに行ったの、成城の。その夫婦、御殿場にいるときからよく遊びに来てくれていて。「自分のところに、ちびちゃんが2人いるから、子どもの面倒をみて。〔あなたはうちの〕近くのマンションを借りて、そっから通ってきて」って。〔バーバラさんは〕ご主人が日本人で、〔おふたりは〕アメリカの大学で知り合って結婚したんですって。

で、バーバラさんと仲良しのアメリカの友達が〔遊びに〕来て、「ミサ子はアメリカに行きたくない？」「行ってみたいなあ」って何気なく言ったの。そしたらもう、とんとん拍子に決まっちゃったの。

バーバラさんのお友達夫婦は、モーランさんっていうご主人で。それが全部、御殿場の復生病院が関係あるのね。この方たちみんな、あのへんにスキーに来るでしょ。〔帰りに〕復生病院に寄って。それで、ちょうど私がいたから、紹介してもらって。みんなそういうお知り合い。

〔アメリカへ行ったのは1974年。まだ〕成田〔空港〕がなくて、羽田〔空港〕から〔行った〕。ハワイで〔乗り換えのために〕いったん降りるでしょ。税関、

引っかかっちゃったの。バーバラさんからアメリカの妹さんへの小切手を預かってたんですよ。その小切手がまた、でっかい小切手だったのね。「なんでこんな大金を持ってるか」って止められて。もう泣きたくなくなった。私一人、こっから帰されるかと思って。そしたら、係の担当が〔日本の〕バーバラさんに電話してくれて。〔バーバラさんが〕「それは、妹に渡す小切手だ。それはもうダメにしてくれ」って言うてくれて。それでやっとな税関を通してもらえたの。

〔アメリカには〕1年近く〔いました〕。〔むこうのお宅の〕子どもと遊んだり、料理作ったり。でっかいスーパーがあるから、そこまで一人で行って、必要なもの買ってきて。〔行ったのは〕ミネソタ。田舎でね。海かと思うくらいの湖があるんですよ。びっくりしっちゃった。ミネソタではヨットに乗った。ヨットが右へカーブするときは、こっちに移動して、今度はこっちへ曲がるから、こっちへ移動しろって。それで、はじめて私、水着を着たのよ。水着を着て、湖で子どもと一緒に遊んで。

〔むこうは、光の〕反射がすごくて、私、目が真っ赤になって、頭の芯まで痛くなったの。これは困ったことになったと思って、全生園のA先生に手紙書いたの。「目が痛くてこうだけど、薬を送ってもらえないでしょうか」って。

「送るわけにはいかない。帰ってきなさい」っていう返事（てがみ）だったの。うわあ、どうしようと思って、モーランさんの奥さんのヴィリジアさんに相談したら、「ミネソタの大学に、日系のすばらしい先生がいる」って。そこへ連れて行ってもらったら、その先生、私の手を見たとき、ハンセン病のことをすぐわかった。びっくりして、「ヴィリジアさん、言ったの?」「いや、言ってない」。で、ヴィリジアさんがそこではじめて、先生に言ったの、こうしてこうだっていうことを。その先生、日本語が少ししかできないからね。それで、先生が「この薬を朝昼晩つけて、もし治らないようだったら、また来なさい」って。〔処方してくれた〕目薬つけたら、きれいに治った。

帰りたいしなかったあ、日本に。アメリカはいいね。日本では、私、いつもこうして〔手を隠して〕歩いていたの。アメリカへ行くともう、解放されたような感じになるのね。〔旦那さんは〕ロバート・モーランさんだけけどね、「Bob（バブ）さん、Bob（バブ）さん」言ってるの。とにかくもう、楽しかったなあ。また行きたい。この〔数日〕前も、この人が仕事で〔日本に〕来た。〔1月〕30日に来て〔2月〕4日に帰ると。あの方たち、私の誕生日は必ず忘れない。アメリカから贈り物がきたり。〔今年は、私の誕生日の2月〕4日に、ふたりでね、食事して、夕方〔アメリカへ〕帰るって。で、お土産を持ってホテルまで会いに行って。むこうからも、おっきなお土産の袋をもらって。「ミサコ、ハッピーバースデー！」って。みいんな周りの人が見て、私、恥ずかしくてさ。もう、いろんな思い出話、してね。この人、5人、子どもがいるんですよ。〔私がアメリカに行ったとき〕赤ちゃんだった子がもう、30なんぼだから。〔4人続けて女の子で〕“ああ、このうちは若草物語だな”って。5人目に男の子が生まれたの。その男の子がアメリカのテレビ局で優秀な仕事してるらしいの。ひとりの女の子はパイロットになって、アフリカの一番貧しい国へ行って、医療〔物資〕を運ぶ仕事してる。〔日本に来たとき〕並里〔まさ子〕先生のところまで〔一緒に〕夕食をご馳走になったの。

〔そうやって〕私のとこに子どもを一人ひとり寄越してくれる。だから、〔うちの〕旦那が〔生きて〕いたときは、助かった。旦那がぜんぶ道案内してくれ

て、箱根から〔なにかから連れて行ってくれるから〕。一回は、私が〔アメリカへ〕行ったときに生まれたモーリーが来て。そのときは、「おれは〔フランス〕大使の〔運転手の〕仕事で、今日はスケジュールいっぱい。おまえ、ホテルでモーリーに会ったら、これしゃべれよ」って、全部書いてくれるの。こういうこと言えば、相手の返事はこれが来る。そして、またこれを言え、って。で、ぜんぶ覚えてね、山手線に乗って、赤坂プリンスに着いて。そして、モーリーの顔見るなり、一生懸命練習したの、ストーンと忘れちゃったの。困ったなどと思って、旦那に電話して。「おれ、いま忙しいんだ！ とにかく、モーリーと替われ」って。〔モーリーが〕築地市場に行きたいって〔いうのを聞き出してくれて〕。そして、「夜には仕事が終わるから、8時ごろ、原宿の喫茶店にモーリーを連れてこい。隣のパパたちも一緒に連れてこい」って。それで、旦那が食事をご馳走してくれたの。旦那がぜんぶ、モーリーに、これはなんだって説明してくれて。私が「ああ、今日は疲れたな」って言ったら、「なんで、おまえが疲れるんだ。おれのほうが疲れる」って。いつつも、マンガみたいだった。ほんとにね、いてくれて、ものすごくありがたかった。いなくなったら、今度は誰が来るわってなったときに、おたおたしちゃう。つい、並里先生に電話する。「今度はレベッカが来るんだけど、先生、会ってもらえますか？」って。

1976年、聖イグナチオ教会で挙式／そして夫が病死するまで

結婚は〔アメリカから帰国した後、1976年、四谷の〕イグナチオ教会で。それがまた、ガラルダ神父さんが立ち会い〔をしてくれたの〕。旦那のきょうだい、私のきょうだい、みんな来てくれた。御殿場の知り合いの人とかね。

〔子どもを産んだか、ですって？ 子どもは〕いないです。「お子さんをつくっちゃダメです」って言われて、復生病院で。旦那も〔一緒に〕相談に行つて。「子どもがまた病気になるから」って。

旦那は、お父さんは戦争に行つて亡くなって。お母さんは、旦那が赤ちゃんのときに……。福岡〔県〕で、土手で赤ちゃんの声がする。そしたら、お母さんが倒れて死んで、赤ちゃんを抱っこしてた。近所の人が「大変だ！ 大変だ！」ということで、〔近くの〕豆腐屋さんにすぐ連れて行つて。〔そこなら〕生まれたばかり〔の赤ん坊〕がいるわ、ということで、豆腐屋のお母さんがお乳を飲ましてくれたの。その豆腐屋さんの裏に、カトリックの〔養護〕施設があったんですよ。お乳が離れてから、〔旦那は〕その施設でずっと育つたの。新聞配達して中学校卒業して、東京にいるお母さんの親戚のどこへ訪ねて行ったら、数珠つながりに、兄さんが2人いるのがわかって。そしたら今度、父親も生きて帰ってきたのがわかって。それで〔旦那は〕父親をものすごく、死ぬまで恨んでたの。3人も子どもがいながら、なんで嫁さんの実家へ帰らないで、浜松の女と一緒に暮らしたんだって。〔病気になる〕兵隊さんが入る病院が〔浜松にあったんだって〕。そこで看護婦してた人と仲良くなつたの。

〔初めて会ったとき〕「おまえが〔生まれて〕いるって思いもしなかった」って。だから、「親でもない、子でもない」って怒っちゃって。旦那は、兄さんたちともあんまり付き合いしなかった。「兄弟のような気がしない。他人のほうがずっと兄弟だ」って。施設で〔一緒に〕育つた人たちが、もうずっと、きょうだいみたい。福岡に帰ると、その豆腐屋さんのうちに帰って行きよつたの。〔乳兄弟がいるでしょ。〕

だから、いい友達に恵まれてるの、旦那も。私、〔ハンセン病だったってこと〕誰にも隠してたでしょ。〔旦那が〕私に内緒で、みいんなに、私のことハンセン病だったって言ってるの。そのたびにビクって思う。〔そう言うとき〕「おめえが隠すから悪いんだ」って怒られる。

〔自分が〕亡くなる前にもね、みんなに言っていたみたい。「なんで〔言ったの〕？」
「オレはどうせ死ぬんだから、ミサ子が人にいじめられないように、なんかあったらよろしく頼むなって〔みんなに頼んでおいたんだ〕」って。だから、Yさんなんかも、「Wさんがあんたのこと頼むねえって言っていたよ。病気のことなんか気にすることないよ」って。〔フランス〕大使館の友達にもみんな言ってるし、〔住んでる〕都営住宅のほうでも、いろいろな人に私のことを言っていた。隣のママたちもみんな知っていた。私、全然知らないと思っていたの。〔旦那が〕亡くなってから、〔私が〕NHKに出たときも、NHK〔の番組で私〕を見て、このハンセン病だったってことで、追い出しにかかられたら、私、どこに逃げたらいいかなあ思っただけ、いろいろ悩んだ。鹿児島島の敬愛園（びょういん）に帰るのかなあ。全生園には帰りたくないなあ。いろいろ考えながら、そのときはそのときだっただけ、覚悟をしたの。そしたら、見た人たちが、嫌なことひとつ言わないの。「見たよ、見たよ。苦労したねえ」って言われる。そして、「Wちゃん、偉いねえ」って、みんな、旦那を褒めるの。旦那がいたからこそ、みんなが声をかけてくれた。もし旦那がいなくて、私一人だったら、“ハンセン病だったんだよ、あの人”ってなるでしょ。旦那がいて健康者だったもんだから、“ああ、ハンセン病でも、健康者といっても、なんでもないんだな”というふうに取り立て。だから、旦那のおかげだと思ってる。喫茶店のママでも、みんな言うもの、「Wちゃん、よくしてやったよね、あんたに」って。みんなが見て見ないふりして、見てたんですね。喫茶店になんか食べに行くでしょ。もう必ず、旦那がおしぼり取って、火傷しないようにフーフーして〔私に〕持たしてくれる。で、〔隣の〕Mちゃんも、こうして持たしてくれる。旦那とおんなじことをするなあと思っただけ、私見てたの。隣のパパが「おばちゃん、悪く思わないでね。Mはおじちゃんを見て、不自由な人にはこうしてやるもんだって〔学んだみたい〕」って。近所のひとにもよくしてくれるの。「困ったことがあったら、いつでも言えよ。遠慮するんじゃないよ」って。

〔夫のWKが亡くなったのは〕今年の1月22日でちょうど5年。〔亡くなる前の年の〕6月22日に、「おれ、どうも調子悪い。今日はおれの誕生日だから、病院に行ってくるよ」。もう末期癌だったの。亡くなったときが1月22日。

〔月命日のお参り〕5年間欠かしたことはない。毎月22日、行ってるの。

〔私の〕母親は再婚してたけど、福岡で亡くなって。お母さんのお骨、再婚相手の家族が持って行ってくれなくて、福岡のお寺に預けてあって。〔旦那が〕自分が死ぬのがわかって、〔福岡の〕友達みんなに〔別れの〕挨拶に行ったとき、そのお寺さんに行ったら、うちの母親のお骨、もう片づけるところだったんですって。「よく来てくれましたね」って言われて。イグナチオ〔教会〕に相談したら、宗教関係なく大丈夫ですよ、って言われて。それで、旦那と一緒に〔教会の納骨堂に〕入れてもらった。だから、そこに〔私も含めて〕3人、入るのお願いして、ちゃんとしてあるの。

〔いま都営住宅に住んでいるのは〕成城に住んでいたとき、都営住宅の空家抽選を申し込んだの。申し込むたんび、はずれ、はずれ。10回目で当たった。

〔都営住宅に移ってきたのは隣の〕Mちゃんが赤ちゃんのときだった。もう、いま〔彼女〕31か2かな。——旦那が亡くなってから、アパート代も安くなった。1ヵ月、5,920円になったの。

〔並里〕先生が、「将来は、ここで一緒に住もうねえ」と、何回も言ってくださって。旦那の葬式が終わった明るる日だったかな、夜、電話があつて。「ミサ子ちゃん。主人がね、ミサ子ちゃんのこと、一生面倒をみようねって言ってくれたよ」って。その言葉を、先生も泣きながら言われて。「ありがとうございますって言って。友達〔のなかに〕は「敬愛園に戻ってこないか」って言ってくれる〔人もいて〕。敬愛園だったら、鹿児島妹なんかもいるしね。妹は、ご主人と子どもみんなに、私の病気を教えてるの。弟は奥さんに言っていない。私が「将来、年取ったら、鹿児島に帰ろうか思うんだ」と言ったら、弟が「事を起こすようなことをしないでくれ」って言ったから、カッとなっちゃってね。「あんた、そんな考えでいたの？ なにも、私、悪いことしてないよ。これは、私の運命だから、だれも恨まないけど、きょうだいにそういうことを言われるのはね。あんたがもうちょっと気持ちを大きく持てば、奥さんにもちゃんとと言えるはずだ」って、弟にしつちやかめつちやか言ってから、電話番号も住所もぜんぶ消しちゃった。妹なんかはね、「なんで、家族で隠し事しなきゃならないのか」って言うんですよ。でも、やっぱり、この病気の名前がね、よくない。

再発して全生園に入院、そして医療過誤

医療過誤裁判、楽しかったあ、私。裁判は、川島〔光夫〕さんの支援（あれ）でできたの。川島さんと巡り合わなかったら、裁判なんかしてないと思う。〔敬愛園のとき以来〕何十年ぶりに会ったんですよ。私〔の容貌〕がこんなにも変わったもんだから、「どうしたの？」ということで、その話になってね！

〔アメリカから帰ってきて、結婚して。結婚してからも、私は仕事してました。〕成城でイタリア製の洋服を売ってるお店があつたの。そこ〔のお宅〕でずっと働いてた。そして、庭をはさんで、そのイトコさんのアイスクリーム屋さんがあつたの。このお宅からも、「山下さん、うちにじいちゃんがいるから、掃除、手伝いしてもらえるかなあ」と。それと、UCC 珈琲の、次男の息子さんのお嫁さんのところも、仲良しだったから、私のこと、来てもらえないかな、って言ってくれて。週に3ヵ所、行ってました。そのあと、もうひとつ、スウェーデン織物の先生からも、「ミサ子さん、もし時間があつたら、来てくれる」って言われて、4軒行ってましたよ。みんな、やさしい人ばっかりで。だから、すごく、働くのが楽しみだった。〔でも〕働いてるうちに、だんだんだんだん、なんだか様子がおかしいなあと思って、全生園（びょういん）に行ったら「入院したほうがいい」って言われて。そのときは、すごいショックでね。足の裏も摩擦水疱で傷になっちゃってたの。旦那が「思い切って、入院しろ」って。それで、みんな仕事を辞めた。

〔全生園の病棟には〕何年に入ったかなあ。並里先生が〔1992年に〕全生園に来られるちょっと前だった²。私が入ったのは、Sさんが〔誤って処方された〕薬〔のせい〕で亡くなった直後（とき）。入って1週間もたたない〔ときに〕、私〔園内の〕売店に買い物に行ったのね。男の入所者（ひと）たちが、ショッピング〔センター〕の前の椅子で、お茶飲んだり煙草吸ったりしてて。うちがシ

ヨッピングから出てきたら、「なんだ、あんた、ここへ入ったのか?」「はい」「どこの病棟?」「三病棟」「誰だい、主治医は?」「K先生」「やめたほうがいいよ。この前、Sが死んだばかりだ。おまえも殺されるぞ。プレドニン、使われるぞ」って言われたのは覚えているの。——〔けっきょく〕それでやられちゃったの、私もね。顔がボコーンと膨らんだ。プレドニンが、そんな大変〔な薬〕だという説明、してくれないんですもの、先生が。〔ただ〕「明日から、一日6錠飲め」って³。

〔売店の前で〕それを言われたときは、「ああ、そう」って言うだけで、まさか、そんなこと〔ほんとだとはい〕考えもしないから。こっちは、早くよくしてもらいたい。私、毎朝、言われたとおりに6錠飲んで。そしたら、1ヵ月ぐらい過ぎてから、隣〔のベッド〕にいた、私より2つ年下で、目を悪くした人が、夜中12時、看護婦さんが消灯でまわってくるのが終わったところに起きてきて、「山下さん」て叩くから、びっくりして。「なんなのよ?」「シー。私ね、あんたに内緒にしろって看護婦さんからも医者からも言われてるけど、あんたが飲んでるのはプレドニンだよ。薬の字引を持ってきて、「これだよ」って教えてくれて。「真面目に飲んでると大変なことになるよ。Sみたいになるよ」って。

普通のお医者さんだったら、「この薬飲んだら〔副作用で〕こういう症状が出ることもあるけど、それが出たら、すぐに言ってくれ」って言うでしょ。それないし。ただ、飲め、って言うだけ。いやあ、どうしようかなと思ながら、それでも、やっぱり、知らん顔して飲んでたら、だんだんだんだん、顔が膨らんできて。体重が85キロぐらいまでなったの。からだもきついし。目の調子もよくなってきて。だんだんだんだん、ここに、こう、小豆ぐらいのが出たんですよ。私、いつも、自分で点検してたの。なにか出たら怖いから。徐々に徐々に、小梅ぐらいになってきて。小梅ぐらいのときに、K先生に、「先生、これ、なんかできてるんだけど」って言ったら、「ほっとけ。たいしたことない」って。そしたら、小指ぐらいになって。「先生、こんなになったよ」。「あんまりいじるなよ」って。もっとおっきくなってからでも、「そのうちよくなるから、ほっとけ」って。これは、おかしい。困ったなと思って。鼻も詰まってきた、心配になって、耳鼻科に一人で行ったんですよ。耳鼻科の先生に「ここまでなるまでに、誰か先生に診てもらわなかったのか」って言われたから、「K先生には相談してるけど、ほっとけで」。そしたら、先生が「明日、〔外の〕病院に行こう。これは、もしかしたら手術するかもわからない」って。エコーをしてもらって、甲状腺〔に腫瘍ができていることがわかって〕、全身麻酔で〔それを〕取る手術をもらったの。私自身、カニューレ〔を挿入すること〕になるんじゃないかと思って、心配だったの。

それで、プレドニン飲んで、どんどんどんどん、髪の毛が抜けてきだしたの。朝起きると、髪の毛がワァーって枕〔に付着している〕。お風呂に行けば、洗面器に〔髪の毛が溜まる〕。で、枕〔に付いた髪の毛〕をガムテープで取って、K先生に、「先生、こんなに髪の毛、抜けるよ」って言ったら、「らい病だから、しょうがねえじゃないか」って。〔あの先生〕かならず「らい病」、くっつけるんですね。もうちょっと、言いようがあるでしょ。それで、こんど、顔がヒリヒリヒリヒリ、神経痛が始まった。「先生、顔がピリピリピリピリするんだあ」って言ったら、「そのうち、ベロンベロンになるよ」って言われたの。

〔私〕一晩眠れなかった。

それで、M看護婦さんに「ちょっと来て」って〔呼ばれて〕。「こんど、新しく来た女先生が〔ナース〕ステーションに来ちゃあ、あんたのカルテとH君のカルテを見てるよ」って。Hっていう、日系のブラジルの子がいたの。「あんたと、その子と、〇〇さん、3人のことを先生心配して、溜め息ばかりついて、カルテ見てるよ。思い切って、お医者さんを替えな」って言われたの。私、そのときに決心して。K先生が〔回診に〕まわってきたときに、「先生、私、今度来た女先生に替わりたい」って言ったの。そしたら、黙って部屋を出て行っちゃったのね。そんで、婦長さんが呼びにきて。〔行った部屋にいたのは〕M看護婦さん、私、K先生、婦長。目も見ない、顔も見ないで〔そっぽを〕向いて、婦長が「どうするの？」って。「私、並里先生に替わります。いままで長いあいだ、お世話になりました」って言ったら、K先生が「あとはどうなるうと、おれの知ったこっちゃねえや」って言って〔部屋の外へ〕出て行ったの。

ほんで、こんど、〔入院患者の〕Kさんが透析が始まって。6人ぐらいで食事をしたの、食堂で。Kちゃんが「つらいなあ」と言いながら、量りながら食べてたんですよ。そしたら、K先生、婦長、そして、白衣着たどこかの男先生と女先生が入ってきて。「おお、税金泥棒がメシ食ってるか」って言ったの。Kちゃんが「それだけは言わんでくれよなあ。おれ、つらいよなあ」って言って。婦長、笑ってて、注意もしてくれない。それで、私ら、夕方5時前に、下の公衆電話から副園長のM先生に電話したら、留守で、並里先生に替わったから、「先生、じつは、今日〔K先生が〕お客さんを連れてきて、『税金泥棒がメシ食ってる』って言われて、みんな〔もう〕食べませんでした。このことは、M先生にも伝えてください」って。そしたら、並里先生が「そのことは必ず伝えます。嫌な思いさせたね。ごめんなさいね」って。〔K先生は〕あの態度とね、煙草吸いながら入ってくるんですよ、病棟に。看護婦さんにも注意されたりして。そんで、こんな先生はどうしようもないと思ったから、先生にどう思われようと、替わってよかったあと思って。「おまえたち、いい枝振りがあるから、いつでも死にたかったら、そこの枝を選べ」って、こうだったでしょ。

日系ブラジル人の自死

H君、神経痛がきたりして、悩んでたの。黙あって、おとなしい子だった。「あんた、ブラジルにおじいちゃんもいるんだから、ちゃんと治療しなきゃダメだよ。こんど来た女先生が立派な先生だから、お医者さん、替えたほうがいいよ」って。「でも、ぼくは園長先生とK先生に診てもらってるから、園長にも悪いしK先生にも悪い」「そんなこと考えてたら、あんた〔国に〕帰れないよ」って。その夕方、えらい片づけしてるんですよ。焼却炉へ紙袋持って行って、燃やしてる。おかしーい、思っ。そして、私に、ブラジルの、毛の帽子をくれたのよ。「山下さん、これ、あげるよ」って。「だって、あんた、大事なものでしょ」「いいから使って」。明るる日の朝、私がなんとなく病棟のベランダに出て、ひょこっと横を見たら、テーブルがあって、そこの椅子に毛布を掛けて、Hさんがいるの。寒いのに。「Hさん、神経痛によくないよ。そんなとこ寝たらダメだよ」。返事もしないの。で、ウィスキーの瓶がある。あれ、お酒も飲まない人が、なんでウィスキーの瓶があるかなと思って、すぐブザーを押して当直の看護婦さんと呼んだ。看護婦さんが「Hさーん」って揺すっても

[グタツとしたまま]。慌てて看護婦さんが婦長を呼びに行つて。私、婦長さんに、「婦長さん、警察を呼んでください」言ったの。「山下さん、ここの病院は警察を呼ぶとこじゃないんだから」って、婦長に怒られちゃつたの。[H 青年は]個室に入れられて、1週間意識不明のまんま寝て、そのまま亡くなった。まだ35でね。もらった眠剤を貯めて、ウイスキーで飲んだらしい。

そのあと、今度は、バスの運転手さんで、56歳かな、入つてきたの。頑丈なからだの人。3日ぐらいして、食堂の前ですごい音がするからそおつと覗きに行つたら、あんな元気だった人が、鼻がどこにあるかわからないぐらい、顔がボールみたいに腫れちゃつてる。手もグローブみたいになつちゃつてる。足には注射器が刺してあって、足もバンバン [に腫れてた]。なんで、たった3日で、あんなになるのおつて。入院して1週間で亡くなったの。[ハンセン病のことは]奥さんに内緒で[全生園に]入つたんだつて。簡単に帰れると思つて。[連絡を受けて]奥さんが慌てて全生園に来て、すごいショックで、泣いてねえ。私ら、1人亡くなるたびに怖くて。私らは[全生園の病棟にいるのが怖くて]おんなし部屋のひと、帰省をもらつては[自宅に]帰つた。

お風呂場で水死したおばあちゃんがいたときも、警察を呼ばないし。[まだ]H君が生きてるとき、「おばあちゃんが1人入つた。なんでえ。ぼくが入る時間だったのに」と帰つてきた。そのときにもう、浮いてたの。[そのときも]婦長がものすごい剣幕で……。もう、いっぱい、いっぱい、あるんですよ。病棟で、目の不自由な患者(ひと)は、お金を盗まれるし。[一緒の]病室(へや)に目が見えない人が2人いたときは、2人ともお金、盗まれてる。私がこっちのおばさんの髪(かみ)の毛、毎朝ブラシしてやつて。[そのおばさん]抽斗(ひきだし)に、ポンと仕舞うだけだったから。茶封筒に10万円入れてたんですつて。そしたら、それがチョコチョコなくなって、最後はゼロになつて。こっちの[目の見えない]人に「ミサちゃんには言わないでね。あの人、気にするといかんから」って。もう一人の人も、見舞金を洋服ダンスにしまつておいて、それが袋ごとなくなつちゃつたの。婦長さんが「お金には気をつけてください」って貼り紙をして。私はまた詰所に行つて、「婦長さーん、なんで警察を呼ばないんですか?」「あんた、前も言ったでしょ。ここは警察を呼ぶような療養所じゃないんだ」つて言われて。それで、私、カッとなつて、「私が警察に電話します」言ったの。「いらんこと言つちゃダメ。[そんなことしたら]自治会に言い[つけ]ますよ」つて言われた。自治会に言われたら、私も全生園(ここ)におれなくなるなと思つたから、黙つた。

ほんで、髪(かみ)の毛も伸びてくるし、パーマをかけるのに、休みをもらつて[自宅に]帰つて。[馴染みの]パーマ屋さんに、いつも[自宅に]来てもらつたの。そしたら、だんだん、[薬(かじ)のせい]で顔(かほ)が変(かへ)になつてくるし、髪(かみ)の毛は抜(は)けてくるし。「婦長さん、全生園(ぜんせいえん)のパーマ屋(かみ)さんでカット(カット)してほしいんだ」つて言つたら、「ダメ。退所(たいしよ)者の人(ひと)は、カット(カット)できない」つて言われたの。しちゃいけないんだつて、自治会(じちかい)の命令(めいれい)で。自治会(じちかい)にも言つたけど、「ダメだ」つて。[自治会(じちかい)は、私が]再発(さいはつ)して入(い)つてきたら、明る(あかる)く日に自治会(じちかい)費(ひ)をもらいにきたんだから。「なんなの?」言うたら、「入院(にゅういん)したから、自治会(じちかい)費(ひ)ください」。自治会(じちかい)費(ひ)はすぐ(すぐ)もらいに来て、パーマ屋(かみ)でカット(カット)もしてくれないの、退所(たいしよ)者(もの)だからと。しょうがないから、私は、うち(うち)へ帰(かえ)つたとき、お風呂(お風呂)で、バリカン(バリカン)で刈(刈)つて、丸坊主(まるぼうず)にしちゃつたの。

並里先生に主治医交替

まあ、そういうこともあったりでね。なんのために入院してきたのかなあって言いながら、よくなるしないで、だんだん悪くなる〔一方だった〕。〔でも〕最後のころに、K先生に菌検査してもらって、「いま、菌がいくつですか？」って。最初入ったとき、最高の6だったんですね。「2になったよ」って言われた。「バンザーイ」って喜んだ。それで、並里先生に替わる前に、N園長とK先生に内緒で、うちの旦那が並里先生に相談して、岡山に優秀な先生がいるから——あの先生、誰だったかな。〔邑久光明園園長の〕原田〔禹雄(のぶお)〕先生⁴。その先生の診察を受けに行くように、〔全生園副園長の〕M先生もしてくださって。で、旦那が車運転して、岡山まで行ってきたんですよ。〔原田〕先生が「菌検査、ちょっとさしてください」って。〔菌検査の結果〕先生が、「残念だけど、菌が最高の6だ」って。「ええー、K先生は2って言ったのにい。7年も全生園で治療しながら、6が2になったと嘘をついて。なんでまた、6ですか。どうすればいいんですか」って、おっきい声〔出してしまつて〕。〔原田先生は〕こっから京大病院に入院させて、そっから退院させるつもりで手続きしてくださってたの。「これじゃあ、手続きもできない。〔全生園の〕並里先生は素晴らしい人だから、治療法の指針(あれ)をちゃんと書きますから、このまま全生園に入院してください」って。〔先生が書いてくれた〕手紙をもらって。また車〔に乗って、フェリーの〕さんふらわあ〔号に乗り継いで〕東京まで帰ってきて。「いま港に着いたんですけど。これから全生園に行きたいけど、会ってもらえますか？」って、旦那がM先生に電話かけて。そしたら、先生が「すぐ自分の部屋に来てくれ」って。並里先生が「これからは私が責任をもって治療さしてもらいます。ちょっと時間かかるけど、2年我慢してね。必ずゼロにするから」って。薬を飲むときも、「私が言ったとおりに飲んでちょうだいよ」って。「そして、なにか症状が出たら、かならず言って」って。ほんで、先生がぜんぶ診てくれるの。それで、約束したとおりの2年でゼロになったの。「もう大丈夫。病棟にいつまでもいちゃだめだから、独身の部屋をもらって、そこから治療室へ〔通うといい〕。〔退院となったら〕そっからうちへ帰ればいいから」ってということで、先生がぜんぶ手配(それ)をしてくださったの。

私、目がいちばんひどかったの。先生も「目がいちばん〔危なかった〕。失明寸前のような感じだった」って言われてね。私、並里先生がいなかったら、うちに帰れなかったと思う。だって、目が見えなくなったら、〔手の〕知覚(かんじ)がないから、何を持ったかわからないんですよ。だから、失明したらどうしよう。私もう、全生園で〔一生を終えるのか〕、嫌だなあ。旦那はどうするんだろうな、って思ってね。だから、まさ子先生に退院さしてもらって、よかったあ。M先生にもお礼を言って。「先生、ありがとうございました」「よかったねえ、山下さん。何歳まで生きる?」「私、百歳まで」「ああ、その調子でいこう」って。M先生も、すんごくいい先生だったの。〔1993年には〕園長先生になられてね。だから、ほんと、M先生とまさ子先生に、私、助けられた。

医療過誤訴訟を提訴

〔2002年に全生園から退所した後〕川島さんに裁判〔を勧められて〕内藤〔雅

義] 弁護士 (せんせい) を紹介してもらったの。そんで、[裁判をしたいってことを] 旦那にも話したら、「なんで、そんなことを、おまえ、相談もしないで」って [怒られて]。いまだから言うけどって、全生園で K 先生に「税金泥棒」「ベロンベロン」「らい病」って [言われた話]、こういうこと全部言ったの。「なんで早く言わなかった！」って [また] 怒られてね。「患者を馬鹿にする。いくら国立の療養所で、ただで食事をもらったり、治療してもらっても、みんな人間だぞ。じいちゃん、ばあちゃんたち、あの不自由な人たちが、どれだけ我慢してるのか」って言いながら、自分で泣いてるの。

それで [2003 年 4 月に提訴して] 裁判が始まりましたら、そのときも、全生園の自治会とか入所者 (かんじゃさん) の態度がものすごく変わったの、私に對して。自治会の人「ここら、ウロチョロ歩くんじゃねえよ」って怒ったりね。看護婦さんも口をきかなくなった人もいるし。でも、それでもいいやと思つて。看護婦さんでも婦長さんでも、「よくやってくれたね」と言う人もいたし。まわりのみんなが協力してくださつて。全国の友達も、沖縄からも来てくれたり。アメリカの友達も署名を送ってくれたりとか、いろいろしてくれて。

裁判中に、[新しい] 園長先生から電話があったんですよ。「新宿の厚生会館で 12 時に会いたい」って。園長先生と私と旦那で食事しながら、「山下さん、ちょっとお尋ねしたいんですけど」って。「麻生大臣に手紙を出したのは、並里先生か内藤先生でしょうねえ？」って言われたの。いや、これはカマをかけられたなあと思つて。全生園の実態をちゃんとしてほしいということを、私が麻生さんに書いたんですよ。「お願いすること、今回はじめてですけど、とにかく全生園のカルテがめちゃくちゃで……」というのをぜんぶ書いて出したの。それを麻生さんが、秘書の人も付けないで、一人で厚労省に乗り込んで行って、「患者さんが、あまりにもアレな目に遭っているから、ちょっと調べてほしい」ということを [言つてくださつて]。秘書から、「その結果をお待ちください」って電話があったの。[そのことで] 園長がカマかけたから、「あらあ、先生、内藤先生とかまさ子先生は、麻生さんを全然知らないし、そういうことないでしょう。私が書いて出しましたよ」って。「あらあ、山下さんだったんですかあ」って、とぼけられて。うちの旦那が足でポンと私を蹴ったから、もうそれ以上言わなかった。[園長先生が]「いや、厚労省からね、お叱りを受けました」って。「それで、私は三日三晩寝ないで、カルテをすべて整理して、新しいのを作つて、厚労省へ出しました」って言われたの。うちの旦那、びっくりして。「ちょっと待つてくださいよ。いまのその言葉、何ですか。それじゃ、ミサ子が言ったの、ぜんぶ、ウソになってるんですか！ あんた、それでも園長ですか。患者さんを何だと思つてるんですか！」って、怒鳴りつけて。私、それ聞いたときにね、これは困ったなと思つて。あらあ、麻生さんを騙したことになった。麻生さんは騙されたと思つてるんじゃないかと思つて。もう、つらかった、つらかった、ほんと。もうひとつは、「N [名誉] 園長 [が全生園に来て診察すること] は、私がすぐ辞めさせます。K 先生も辞めさせます」って言われたの。旦那が「この療養所の先生方を、ぼくは信用しません」って言ったの。そして、「N と K を辞めさせるのは、男の約束ですよ」って。

[厚生会館で園長先生に会つて] うちに帰つてから、麻生さんに電話しようとしたら、[旦那が]「ちょっと待つて」って。「今日のこと、おれがぜんぶ整理するから、それをしてからだ」って。[けっきょく] 1 週間してから、旦那が手

紙を書いてくれて。それで、麻生さんのほうから、「わかりました。大丈夫ですよ」っていう電話があって。そのあと1ヵ月してから、私〔の気持ち〕が収まらないものだから、私もまた、ぜんぶ書いて出して。こんど、奥さんのほうから、「麻生も読んで、ちゃんとわかってます」って。「山下さん、大変だろうけど、裁判、頑張ってくださいね。私らは公に出られないから、その点はお許してください」って、手紙が来てね。大事に取ってる、その手紙。そして、こんど、高松宮様も、新聞で私が裁判してるのをわかったらしくて。「自治会自体が、そういうことだとは思いませんでした」って。「頑張ってください」って。

〔並里先生に治療してもらっていたときも〕三笠宮御夫妻と高松宮妃殿下が来て。M園長から、「山下さん、〔ハンセン病〕資料館に来てください」って、病棟に電話があったんですよ。「妃殿下が会いたいっていうことだから」って。

「いや、私、こんな顔になってから、一度も会ってない。ショックでがっくりされると困る」言ったら、「とにかく待ってる」って言われて。それで、資料館に行ったら、三笠宮信子さん、〔信子さんて〕麻生〔太郎〕さんの妹さんですよ。信子さんも「母とオバからもちゃんと聞いていますよ」って。——オバは高松宮妃殿下のことよね。母は麻生〔和子〕さんのことね。だから、「おかあさんにもお世話になりました」って言いながら、「私、こんななって、すみません」って言ったら、妃殿下が泣かれちゃって、困っちゃった。皇室っていうのは、人前で泣き顔を見せてはいけないんだよな、ほんとは。皇室の人は涙は禁物なの。あの妃殿下が泣かれて。あら、泣かしちゃったなあ、と思って。信子さんも、すごくやさしくしてくれて。そこで、私の病気の経過を、並里先生とM先生がぜんぶ説明してくださったの。あのときはうれしかったですね。だから、私は、このハンセン病になったおかげで、もう、ハンセン病様々だと思ふようなときがあるんですよ。なったおかげで、もう、いい人ばかりに恵まれてる。ハンセン病にならなかつたら、普通のおばさんで過ぎてる(笑い)。この病気を嫌う人は逃げていっちゃうけど、そういう人はいらないの、私は。病気だと知っても、なんにも変わりなく、何十年も付き合ってくださいる人たちがね、もう、いちばんの、この世の宝だと思ってる。

だから、〔うちで飼ってる〕ニャンコに、「ばあば、らい病になって、よかったなあ」って言い聞かしてる。〔おかげで〕いろんな人にめぐり逢えた。〔裁判が始まって〕裁判所へ行くのも楽しみだった。最初は怖かったんだけどね。最初〔法廷に〕入ったときは、裁判官が出てこられたら、ガクガクしてたの。わあ、どうしよう、どうしよう。みんなの前で恥かくんじゃないとか、そういう頭でいっぱいだった。〔だけど〕内藤弁護士さんとか鈴木〔利廣〕弁護士さんとか、支援をしてくれるみんなを見て、ああ、大勢来てくれてるなあと思って。すごく、それは勇気づけられた。

裁判官に「何年ごろ、ご主人の仕事は何ですか？」って聞かれたら、あれ、何だったっけなあ、ポカッとして忘れて。ひょっと振り向いたら、旦那が「フランス大使館」って言うたから、「ああ、フランス大使館です」って言ったら、裁判官もみんな笑っちゃって。とにかくドジばかりでね。

〔裁判の途中で〕旦那が「〔N先生とK先生を辞めさせてくれるのなら〕裁判やめます」って、園長に手紙を出した〔ときがあった〕の。それがすぐ自治会に伝わったらしくて、〔そのあと全生園に〕行ったら、自治会の会長さんやら、いままで挨拶しなかった人が、「よく来たね。からだ大事にしなよ」とか

〔声をかけてくるの〕。ああ、旦那が〔園長〕先生に「裁判やめる」というのを書いたから、それが自治会に伝わったんだなって、すぐわかったの。

〔いったんはやめようと思った〕⁵その裁判を、もう一回、しようと思ったのは、内藤先生と川島さんと〔いろいろ話をして〕。旦那は「〔裁判が結着するまでには〕何十年もかかるんじゃないか」って〔心配してたけど〕、「〔いまは〕裁判の期間も短くなつたらしいよ。ここまで来たんだから〔最後まで〕やりたい」っていう話をしたんですよ。そしたら、「おれはね、おまえがまた病気が悪くなって、全生園に行つて、いじめられなきゃいいけど。それさえなければいいがな」って、そればかりは言っていましたけどね。

〔旦那が〕一回、全生園の様子（じつたい）を見に行つたことがあつて。帰つてきて、「まだ N〔名誉園長〕がいる。あの園長、おれにウソついた」って、怒つてたの。「おれ、こんど、ちょっと園長に話し合いに行つてくる。男の約束が違う」って、カッカカッなつてたの。私、「やめときな」って〔引き止めて〕。——K 先生が〔全生園を〕辞めたのも、裁判が解決してから。

〔裁判が始まる時には、並里先生は群馬県草津の栗生楽泉園に移られていて。〕でも、〔並里〕先生は草津からわざわざ〔全生園に〕診察に来てくれて、〔そのときは〕みんな退所者の人が診察に行くでしょ。〔すると、婦長の嫌がらせで〕先生が診察中に掃除機が始まるの。もう、あれだけは、私、先生がかわいそうだった。〔ついには、並里先生、全生園では診察ができなくなって。〕それで、マイクロバスで、うちの旦那が運転して、退所者何人かで草津に行つたんですよ、遊びがてらに。草津の療養所に着いたら、まさ子先生が、ちゃんともう、受付にも事務所にも言ってくれていて。みんなが並里先生見て、おんなじ科白。「あらあ、先生、明るくなった。元気になったねえ」って。全生園ではやつれきっちゃつてて、うんと、かわいそうだった。

裁判官が私の話を聞いてくれた

〔裁判で〕K 先生が言ったのは、私がこんなになつたのは、治療もしないで、勝手にうちに帰つたりしてたからだって。それで、裁判官が〔私に〕「なんで、そんなに〔うちに〕帰つてましたか？」って言われたの。それで、「ほんとのことを、ここで言つてもいいですか？」って言ったの。私、ほんとのことを言わなきゃダメだから〔と〕思つて。裁判官は「いい」って。

K 先生が夜中にね、時計見たら 12 時ちょっと過ぎてましたけども、〔病室の私の〕横にいた患者（ひと）のとこへ来て、こそこそこそ話して、それで、ススーッと急ぎ足で出て行つた。そしたら、その女の人起きて、戸棚を開けて、つかげを手を持って出て行つたの。カーテンがちょこっと開いてたから見てたのね。ああ、これはおかしいなと思つて。帰つてきたのが 1 時過ぎ。それで、明るる日、当直〔の看護婦さんが〕来たら、「私、今日、帰してほしい」って言つて。「何があつたの？」「じつは、K 先生が夕べね、〔隣のベッドの患者さんを〕呼び出して。私、ちゃんと時計も見ただけど、1 時過ぎだよ、帰りが」って。「また始まつた！」って、看護婦さんが言つたわけ。女癖が悪いのを知つたのね。「私、ここに何しに来たかわからないから、とても嫌だ」って。〔私、裁判で〕ほんとのことをぜんぶ話したの。「それがあつて、私は帰りました」って。そしたら、裁判官が K 先生に質問をされた、「いま言われたことに異議はないですか？」って。〔K 先生は〕「なにもありません」って。——〔私

の] 鹿児島の方が来ていて、傍聴席、[ちょうど] K 先生の後ろに座ってたんだって。「もう、タラタラ汗かいてたよ」って言った。

そんときに、ああ、聞いてもらえたかなあと思ったね。裁判官が、微笑むようないい顔で、私が話するの、聞いてくださったの。その裁判官の顔を見ただけで、なんかすごく [安心した]。

それで、内藤先生が [医療過誤の顛末を] 説明されるでしょ。鈴木先生も [歯切れよく] パッパッとってくれる。[裁判長が、こちら側の証人と被告側の証人とを議論させる「対質」というやり方を採用して] 並里先生が K 先生と、和泉 [眞蔵] 先生が [国側の] 石井 [則久] 先生と [やりあったのね]⁶。[それを聞いて] ああよかった、これもう大丈夫だって、そのときしみじみ思ったのね。私、裁判してよかったなあ [って]。和泉先生の話もすごかったものね。[「先生なら、山下さんを治せましたか?」って聞いて] 石井先生の「わかりません」って [答えに対して]、「自分は一人として目を不自由にさした人はいない。私だったら、百パーセント治します」って言われた⁷。

全面勝訴判決

[一審の勝訴判決⁸の日のことは覚えているか、ですって?] いちばん大きな [法廷で] 傍聴席 [も多かった] ですよ。あときはね、大勢、うちの親戚、姪っ子夫婦も鹿児島から来たんですよ。あときは、弁護士さんたち [をはじめ]、傍聴に来てくださった人みなさんに対してのお礼の気持ちがいちばん先に頭に [浮かびましたね]。後ろを振り向いたら、並里先生も泣いてられました。うちの隣の人も初めて裁判に来てくださった。みんなで泣いて喜んで。だから、私は、すべての人に感謝の気持ち。ほんとに、よかったあって。裁判して、よかったあって。ただそこに、うちの旦那が [病気のために] 来れなかったのが、いちばんさびしかったですね。来てくれたら、どんなに喜んだかなあと思って⁹。だけど、みんながニコニコして、大喜びしてくださって。あんなうれしさっていうのは、生まれてはじめて。歳取ってからね、裁判をやってきて、こんないい思い出はないなあと思って。ここまでこれたのは、みなさんのおかげ。みんなの力でしてもらった。だから、いちばん感謝してます。

[国が控訴して、東京高裁での控訴審での和解が成立したのが、翌年の、やっぱり] 冬だったね¹⁰。裁判官がいて、こっちは、私と内藤先生、中西 [一裕] 先生、鈴木先生 [ほか] 何人か [の弁護士さん]。[あと国側の代理人がいて。] ちっこいテーブルでの話し合い。

勝訴判決・和解後も続く一部入所者たちの無理解

裁判が終わってからね、[全生園に] 治療に行つて。足の爪を切ってもらいますよ、[外来に] 並んでね。[午前中は入所者で診てもらう人がけっこういる。] 看護婦さんが「山下さん、午後からのほうがいいよ」って。私も [入所者のみなさんに] 迷惑するといかないから、午後から行くようにしたの。でも、自治会の方が来て¹¹、うちの横に腰掛けちゃったの。いやあ、これ、しまったと思って。で、看護婦さんに対して、「これと呼んだの、おまえだろ!」って。看護婦さんが泣きだしちゃったの。私、「ちょっと待ってください。看護婦さんをいじめないでください。私はね、午後からが混まないから、午後のほうがいいと思って来てる」って [言ったの]。「おまえたちが来るたんびに、おれた

ちがどれだけ犠牲になってるか。退所者は〔退所者給与金をもらってるじゃないか〕、なんのためにゼニもらってるか。こうして全生園に治療に来るのがいるから、おれたちが迷惑してる」って言われたの。「私は〔ここに治療を受けに来るときは〕厚生省が言ったとおりに、保険証を出しています。治療代、材料代、いくらかかったって、新宿区からもちゃんと明細が来ます」って言うたの。こんどは、おまえがどうのこうのって来たから、もう、私がワンワン泣いちゃったの。そしたら、男のやさしい医師（せんせい）がカーテン開けて出て来て。あの先生があんなに怒ったの、はじめて見たの。「山下さん、あなたがた〔退所者〕は一生懸命、外で生活して、働いて税金も納めてくれてる。そういう人たちが、ここに来て、悪いことないよ。誰でも、私たちは診るようになってるんだから、堂々と来なさい」って。もう1人、自治会の人が出て、その人も「迷惑だ。おれたちがものすごい犠牲になってる」って言い出して。誰かが看護部長さんに電話したらしくて、来てくれた看護部長が、その男の入所者（ひと）とのあいだに入ってくれて、「山下さんね、なんにも遠慮しなさんな。平等に私たちは診ることになってますから、誰にも遠慮することないのよ。ここは、そういうところですよ。だから、気持ちを大きくもって、いつでも来なさいね」って。それ言ってもらったら、また泣けちゃって。もう、看護婦さんと私とで泣いちゃって。看護部長さんも「頑張るのよ」って言ってくれたから、私はすごく気が楽になったの。

〔でも〕裁判っていうのは怖い、これだけ恨まれるなど〔あらためて〕思った。私の裁判が〔勝訴で〕終わったら、ほかにまた裁判をやる人が絶対出るぞって、よく話してたのよね。でも〔誰も後に続かなかった〕。やっぱり、そういうのをすると後が居づらくなるし、〔みんな〕我慢してるんですね。

アジサイが咲いて、きれいなのを眺めて〔園内を〕歩いていたら、自治会室から「こらあ、何しに来たあ！〔勝手に〕ブラブラするな」って怒られて。わあ、この人もこんなことを言うんだ、と思った。その人、〔神山〕復生病院にいた人ですけどね。復生病院の職員で食堂で働いていた女性（ひと）と結婚して。で、〔私立の療養所の〕身延〔深敬園〕へ〔二人で〕行ってね。〔深敬園からの転園のかたちで〕全生園に奥さんも“患者”として入ってるんですよ。私、よっぽど口答えして、そういうことを言いたくもなってくるの。もう一人の男の入所者（ひと）も言ったの、「おまえたち、いつも来て治療してる。おれたちの治療代が減らされてる」って言うから、「あんたたちの治療代はあんたたち。私は私。ちゃんと計算されて〔請求が〕来てるんだからね」って言ったの。「ここに、いつまでも来やがって」って言うからね、「悪いけど、この土地はあんたの土地なの？ これ、国の土地でしょ。あんたたちが〔ここで〕治療〔を受け〕、ご飯食べてる。みんな、外の人で働いてね、高い税金払って。みんなから食べさせてもらって、治療させてもらって、住まわしてもらってるんだからね、勘違いするんじゃないよ」って、私、言い返してやったの。〔その人とは〕病室でもしよっちゃう喧嘩してたの。

いくら裁判に勝ってもね、「〔おまえら退所者が治療に来ると〕おれたちの治療代から減らされてる」とか、「外のやつらはゼニをもらってるくせに」って、そればかり言われるの。〔同じ退所者の〕森元〔美代治〕さんに聞いたら、「おれには言わないなあ」って。だから、人を見て言うんだよ。私、女だしね。だから、とくに言われるんだよなあ、と思う。看護婦さんでも、いまだに口を

きかない人がいるんだから。お医者さんでも、そう。いままで口きいてた先生が、知らん顔してね。[だけど] 歯科の先生¹²なんか、すごくよくしてくれる。よくしてくれる人は、もう、わかって理解してくれてる。

註

¹ 同席していた川島光夫による補足説明。

2001年の7月23日に、退所者の会を作った。翌月の11日に〔ミサ子さんが〕ファックスを送ってきた。これを厚生労働大臣に送って、〔問題として〕取り上げてもらいたい、というような話だった。このままでは納得がいかないと。彼女は厚生大臣に直訴すればなんとかなるんじゃないかって〔考えたみたい〕。〔そうしたところで、どのみち〕秘書官止まり。握り潰されて、坂口大臣に届きはしないということで、私は〔裁判を勧めた〕。彼女のことにしても非常にショックだったんだけど、私の療友（ともだち）が2人、“多機能不全”で死んでる。医療過誤。だけど、家族でなければ、カルテを見してもらうこともできない。彼女は本人だったから、それができた。で、並里先生、それから和泉〔真蔵〕先生という強力な先生がアシストしてくださったからね。私は和泉先生のところに3回〔相談に〕行ったんですよ。「じつは、相談で来ました、医療の問題で」と言ったら、和泉先生が「ああ、山下さんのことか」と。ミサ子さんが医療過誤を受けているという実態を知っておられたわけだよ。

² 記録によれば、全生園への、通院ではなく、入院となったのは1990年。2018.6.27、本稿の草稿に目を通していただいた並里医師からメールを頂戴した。

ミサ子さんの入院は1990年です。らい菌の増殖により足の骨が崩れて、形成外科目的で入院した時です。彼女の再発が始まったのは1982年で、この時点で既に再発の初期症状が出ていることが示されます（裁判の重要な論点の1つになりました）。つまり、1992年まで10年間、完全に意味不明の投薬が続きました。

³ 同席の川島による補足説明。

〔プレドニンは〕副腎皮質ホルモン〔剤〕。一日6錠っていうのは30〔ミリグラム〕。一般の人はそのぐらいいは平気なんだ。われわれは免疫力が低下してる。ハンセン病になったこと自体が、だいたい抵抗力がないわけですよ。乾性でとおってる人は抵抗力もあるわけだけど、らい菌と仲良くしてる〔湿性の〕われわれは抵抗力がない。そのうえにプレドニンをやると、もっと抵抗力がなくなっちゃ〔って、体内でらい菌が異常に繁殖してしま〕うわけです。

⁴ ここで名前が登場した原田禹雄には『天刑病考』（言叢社、1983）という著作がある。読んでいて、ある一節に目がとまった。

昭和36年の夏、私が光明園に赴任してきたとき、204号室の入院者8名の主治医をやるようにたのまれた。いずれも、らい性結節性紅斑とらい性神経痛の重症例であった。その上、数年にわたり副腎皮質ホルモン漬けにされていた。患者は、医師の処方した副腎皮質ホルモン剤だけでは気に入らず、闇ルートから入手して、処方以上を内服していた。

副腎皮質ホルモン剤は、単に炎症をおさえるだけのことである点と、連用することによるおそろしい副作用を口をすっぱくして説明したが、204号室の入室者は、それに耳をかそうとはしなかった。

しかし、やがて、私の恐れていた症状が、入室者にあらわれはじめた。やっと、何とかこのホルモン剤から離脱しなければ……という気持ちが、いつはてるとも知れない痛みの中で、おこりはじめた。

いま、その副腎皮質ホルモン剤からの離脱のさ中なのである。そして、何人かは、それに成功して退室した。他の病室の患者にも、このホルモンの恐ろしさをきき、

離脱を希望する者がでた。と、私の出張中に、全く知らないうちに、主治医がかえられていて、私の受持にその患者はなっていた。

無定見に、副腎皮質ホルモン剤を投与しつづけたその内科医を、別にせめる気もしなかった。苦笑して、だまって、みんなひきうけることにした。いつしか、私の受持は12名になっていた。顔ははれて満月のようになり、腹もふくれあがり、手足は細く、骨はもろくなってしまっていた。

204号室、205号室と109号室をまわり、全員とも予想どおり病状がおちついているので、肩の荷がおりの思いがした。(49-50頁)

並里医師が山下ミサ子の主治医となった時点での彼女の症状は、上記の如しであったのであろう。ただ、原田医師がこの日誌風の「虫明通信」のエッセイを書いたのは1964年のことであった。その時点で、原田医師は、副腎皮質ホルモン剤の無定見な投与を批判し、かつ、治療の術を身につけていた。1980年代になってなお、多磨全生園でK医師が繰り返していた医療過誤のすさまじさが浮き彫りにされよう。

5 榎田秀樹は「安心できる医療体制を——ハンセン病医療過誤裁判勝訴、そして残る課題」(『週刊金曜日』544号、2005.2.11)のなかで、「山下さんの裁判は孤独と悔しさに耐える闘いでもあったのだ」として、並里医師の次の言葉を紹介している。「実はですね、山下さんはこの裁判を3回ほど中止しようと思ったことがあったんですよ。でも、山下さんを支えたのは皆さんなんです」。

6 並里医師とK医師との「対質」は2004年7月12日、東京地裁102号法廷でおこなわれ、福岡は傍聴している。7月26日の和泉医師対石井医師のときは、所用のため傍聴はできなかった。

7 『おうえんポリクリニック』(非売品、2018)に寄せた「ハンセン病と歩んだ五〇年」のなかで、和泉眞蔵は次のように述べている。

原告側証人である私と、被告側証人である石井医師が並んで証言台に立ち「対質」をしたときのことである。一連の証言を終えた後、私は裁判長の許可を得て石井証人に対して次のように質問をした。「先生ならこの原告のハンセン病を治せますか」。すると石井証人は「分かりません」と答えたのである。間髪を入れず「私なら治せます」と言うので法廷内で笑いが起きた。平素国民に向かって「ハンセン病は治る病気です」と「啓発」している専門医が、最も身近な所にいる自分が担当する患者のハンセン病を治せるかどうか分からないのでは無責任すぎる。(39頁)

8 「多磨全生園医療過誤訴訟」の東京地裁の判決は、2005年1月31日午前11時から「103号法廷」で下された。この日の各紙夕刊が、この画期的な判決を、「ハンセン病悪化、国に責任／元患者が全面勝訴 5000万円賠償を命令 東京地裁／施策の構造問題 指摘／原告の元患者『一生に残る思い出』」(日本経済新聞)、「ハンセン病療養所 投薬ミス／国に5000万円賠償命令 東京地裁」(朝日新聞)、「ハンセン病後遺症『療養所の医療過誤』／東京地裁 国に5000万円賠償命令」(毎日新聞)、「ハンセン病 治療ミス認め元患者勝訴／東京地裁 国に5000万円支払い命令」(東京新聞)などの見出しのもと報じた。この日、福岡はゼミの学生2人とともに傍聴していたが、判決の次の2点はすこぶる印象的であった。1つめは、損害賠償額の認定をめぐってだ。「東京地裁は31日、請求通り5000万円を支払うよう命じた。佐藤陽一裁判長は『長期にわたり合理性のない診療による過失が続いていた。損害は請求額を超え、約7647万円に及ぶと認定できる』と述べ、国のハンセン病対策に構造的な問題があると指摘した」(毎日新聞)。裁判所が独自に被害を算定したところ請求額を超えるので、満額の賠償金を認める。こんな国賠訴訟の判決は聞いたことがない。2つめは、時効の問題をめぐってだ。「国側は時効の援用も主張したが、佐藤裁判長は、[原告の]女性が国立療養所で診療を受けるほかに、社会に差別や偏見が根強く残る現状に言及、『そうした状況を生み出した国が時効を主張するのは、権利の乱用』と退けた」(日本経済新聞)。これまたすごい判決だ。法廷で聞いていて、からだが震える思いがしたことを思い出す。原告が訴え出ることを困難にしていたのは、被告国だ。その被告国が“時効”を主張するなんてもってのほかだ、と。

- ⁹ 2018.6.27 の並里医師からのメールによれば、「ミサコさんの記憶には、少しでも間違いがあります。地裁で勝利判決を受けた時、ご主人はいました。私と一緒に泣きました」。そう言えば、私たちの記憶でも、あのとき、ミサコさんのおつれあいが法廷にいたように思う。
- ¹⁰ 和解成立は、一審判決からちょうど1年後の2006年1月31日。その前に山下ミサコの夫は病死。和解の内容は、賠償金は5000万円から3000万円に減額。その代わり、全生園は「日本医療機能評価機構」による審査を受けることが義務づけられた。そして、8月23日のハンセン病統一交渉団による政府交渉で、国立ハンセン病療養所全国13園が「日本医療機能評価機構」の外部評価を受けることが約束されるに至った。
- ¹¹ 山下ミサコの医療過誤裁判に対して、多磨全生園の入所者自治会の役員たちが快く思っていなかったのは、周知の事実である。和泉眞蔵は、前掲の『おうえんポリクリニック』への寄稿で、「傍聴のため法廷に入って真っ先に驚いたのは、全生園入園者自治会の幹部が、恥じらう様子もなく被告国を支援している姿だった。重大な医療過誤によって原告が後遺症に苦しんでいるときに、同じ病に苦しんだ体験を持つ入園者自治会の幹部が、加害者である国を支援する姿は正に異様だった」(38頁)と述べている。——ハンセン病療養所は、医師が定数に満たない状況が慢性的に続いている。そのなかで、医師を批判する行動に出て、医師に辞められてしまったら、誰が自分たちを診てくれるのだという思いが、入所者には強いという問題が背景にはあったと考えられる。じっさい、先の、ハンセン病隔離政策に対する違憲国賠訴訟では原告として先頭に立った全生園入所者でさえ、山下ミサコに批判的だったことを、私たちも知っている。
- ¹² この歯科の先生とは、多磨全生園の歯科医長、宇野公男(ひろお)氏のことであろう。2016年5月16～18日、韓国のソロクト百周年記念の「Sorokdo National Hospital 100th Anniversary International Conference」に私たちが招かれて参加したときに、宇野先生にお会いし、夕食会などで意見交換した。その時点で宇野先生は、日本医療機能評価機構の第三者評価に応ずる全生園側の責任者を務められているとのことであった。

Medical Malpractice in a Hansen's Disease Sanatorium: An Interview with the Plaintiff of a Malpractice Suit

Yasunori FUKUOKA & Ai KUROSAKA

Ms. Misako Yamashita's life story is stormy and full of drama. (Misako Yamashita is her pseudonym for the medical malpractice lawsuit.)

She was born in Kagoshima Prefecture in 1938. When she was five years old, her father went to war, and was killed in action. When she was in the 3rd grade of middle school, her mother abandoned her three children including Misako and left home without notice. Misako found her Hansen's disease symptom in the summer just after she graduated from middle school. She entered National Sanatorium Hoshizuka Keiaien at Kanoya City in Kagoshima Prefecture. She had stayed there for ten years. One day Mr. Kikuo Hamano, the chair of Tōfū Society accompanied Their Highnesses Prince and Princess Takamatsu to visit the sanatorium. Thanks to the princess' special attention, Misako moved

to Koyama Fukusei Hospital, a Catholic medical institute at Gotenba City in Shizuoka Prefecture. She earned chances to meet several famous people such as Father Garralda of Sophia University.

After she got released from Fukusei Hospital in 1970, she had stayed in the United States less than a year with the invitation from an American couple who had paid a visit of console to the hospital where Misako had stayed. She had made social network with sympathetic people for a long time and her marriage life had been peaceful with help from the husband who was understanding her disease.

However, her disease reoccurred and she had to be hospitalized in National Sanatorium Tama-Zenshoen at Higashimurayama City in Tokyo Metropolis. She experienced the medical malpractice there and Dr. Masako Namisato saved her life. Misako brought lawsuit against the government of Japan for the medical malpractice. The truth of the medical malpractice in Tama-Zenshoen that we heard from the interview with her was terrible. She won the case in the first trial at Tokyo District Court. Although the government appealed against the decision, they reached an amicable settlement. It must be the Segregation Policy which isolated the medical service for the disease as well as the patients. We thought it is necessary to record the facts to show how poor medical service for Hansen's disease has been formed.

This interview was practiced in February 6th, 2011 at Ouen Poly Clinic which Dr. Namisato, former vice director of National Sanatorium Kuriu-Rakusenen opened in Tokorozawa City near Tokyo. Interviewers were Yasunori Fukuoka, Ai Kurosaka, and Kaori Adachi (Fukuoka's seminar student at Saitama University at the time of the interview). Mr. Mitsuo Kawashima (his former alias in the sanatorium), the former resident who fully supported Ms. Misako Yamashita in the lawsuit sat in company with us for the interview. Misako said, "As I tell you my story, I clearly remind old incidents, the scenery and dialogues, so I tend to keep talking and talking." Her eloquent and humorous telling lasted almost 5 hours.

It should be noted, she published the book *Hohoemite (Smiling)* (1989), the story of the first half of her life.

Keyword: Hansen's disease problem, medical malpractice, life story